

国内の畜産物の需給動向

牛肉

7年4月の牛肉生産量、わずかに減少

生産量

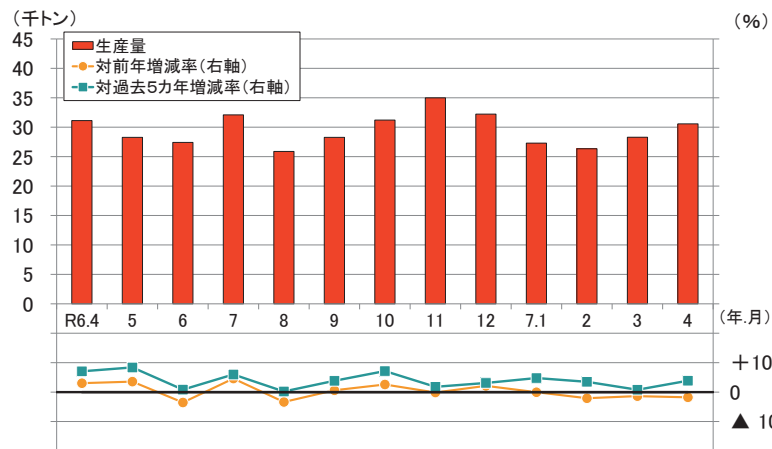
令和7年4月の牛肉生産量^(注1)は、3万580トン（前年同月比1.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万6071トン（同3.8%増）とやや、交雑種は8286トン（同1.2%増）とわずかに、

いずれも前年同月を上回った一方、乳用種は6178トン（同13.5%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較では、3.9%増とやや上回る結果となった。

（注1）生産量の合計は、その他の牛、子牛を含む。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

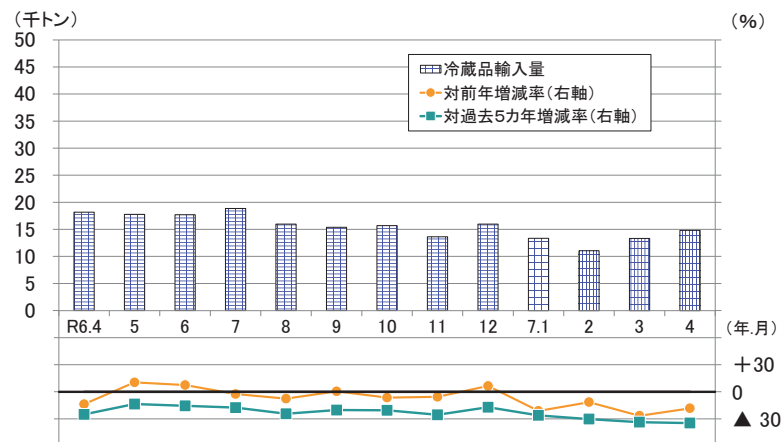
4月の輸入量について、国内需要が低調にある中、為替相場や現地価格の高止まりの影響などにより、主要輸入先を含むほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、冷蔵品は、1万4834トン（前年同月比18.4%減）と前年同月を大幅に下回った（図2）。冷凍品は、上記に加え、輸入品在庫量が比較的高水準であったことなどにより、

主要輸入先を含むほとんどの輸入先からの輸入量が減少したことなどから、3万8233トン（同15.1%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^(注2)でも、5万3087トン（同16.0%減）と前年同月を大幅に下回った。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は34.7%減と大幅に、冷凍品は5.9%減とやや、いずれも下回る結果となった。

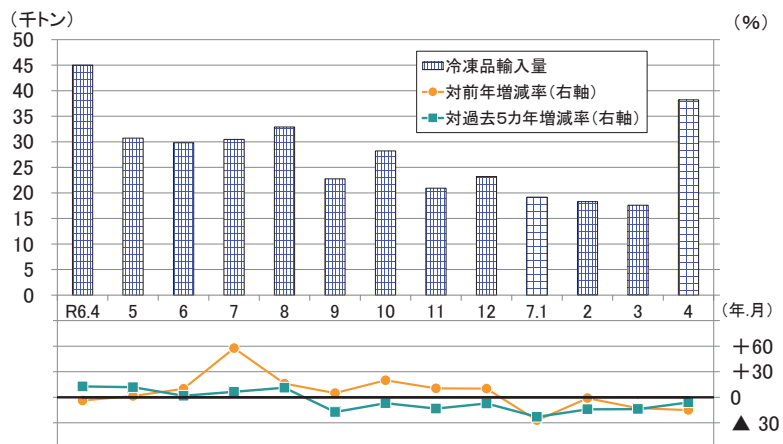
（注2）輸入量の合計は、煮沸肉、ほほ肉、頭肉を含む。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量等

4月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）^(注3)は152グラム（前年同月比2.4%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較でも、15.6%減とかなり大きく下回る結果となった。

4月の外食産業全体の売上高は、比較的安定した天候の中、春休みやお花見などで人出が増え、また単月の訪日外客数が過去最高を更新し、インバウンド需要が引き続き好調で、

メニュー価格の改定による客単価上昇が続いたことなどから、前年同月比6.0%増と前年同月をかなりの程度上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態として、ハンバーガー店を含むファストフードの洋風は、各種値引きキャンペーンや期間限定商品、お得なランチメニューなどが好調で、同4.5%増と前年同月をやや上回った。また、牛丼店を含むファストフードの和風は、客数が減少した一方、客単価の上昇により、同0.5%増と前年同月をわずかに

上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、客数の伸び悩みを客単価の上昇が補う傾向が続いているが、春休みを中心に客足の戻りが見られ、同2.5%増と前年同月をわずかに上回った。

(注3) 1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

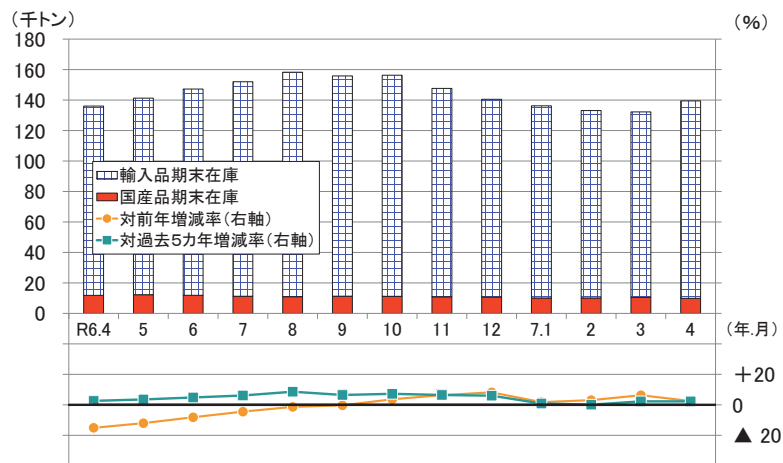
推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、13万9468トン（前年同月比2.5%増）と前年同月をわずかに

上回った（図4）。このうち、国産品は9928トン（同16.1%減）と前年同月を大幅に下回った一方、在庫の大半を占める輸入品は12万9540トン（同4.3%増）と前年同月をやや上回った。

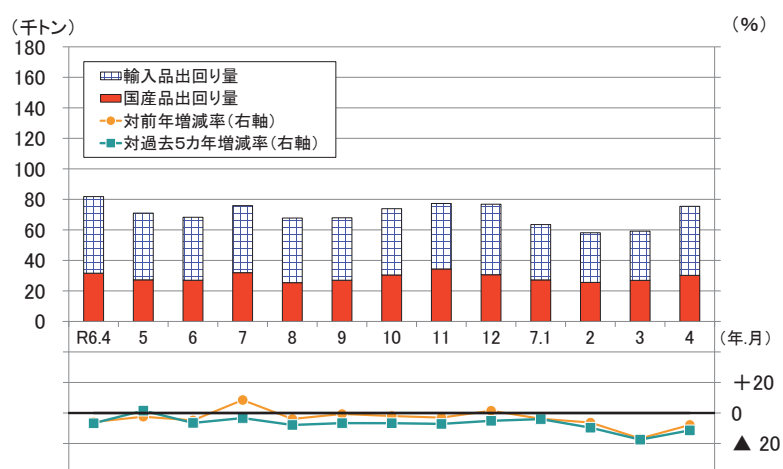
推定出回り量は、7万5447トン（同7.8%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図5）。このうち、国産品は3万210トン（同4.5%減）とやや、輸入品は4万5237トン（同9.9%減）とかなりの程度、いずれも前年同月を下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 丸吉 裕子)

豚 肉

7 年 4 月の豚肉生産量、前年同月比1.9%減

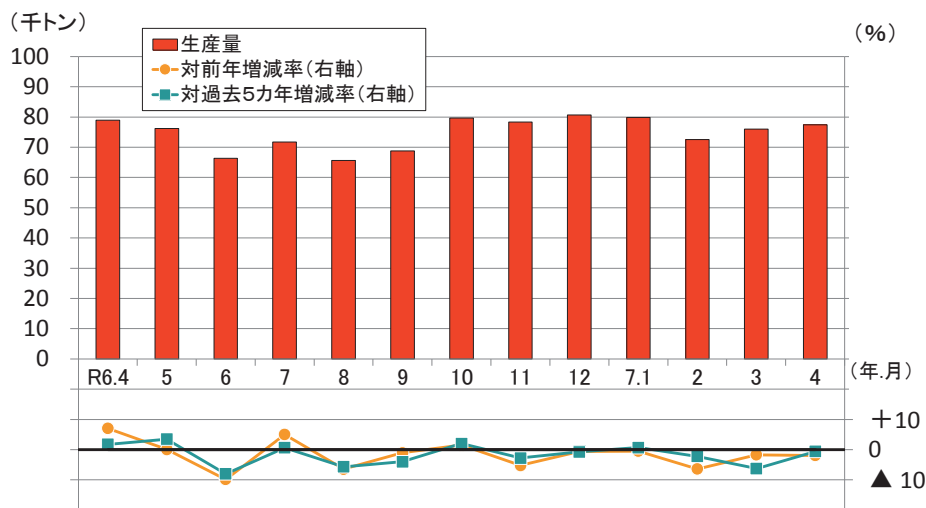
生産量

令和7年4月の豚肉生産量は、7万7457トン（前年同月比1.9%減）と前年同月を

わずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、0.5%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

4月の輸入量について、冷蔵品は、前月分のカナダ産が入船遅れにより通関がずれ込んだことなどから、3万5840トン（前年同月比6.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。冷凍品は、価格優位性のあるブラジル産が増加した一方、現地相場高の影響などにより、それ以外の主要国からの輸入量が減少したことなどから、5万8061

トン（同10.8%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。この結果、輸入量の合計^{（注1）}では、9万3904トン（同4.9%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は1.8%減とわずかに、冷凍品は13.3%減とかなり大きく、いずれも下回る結果となった。

（注1）輸入量の合計は、くず肉を含む。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移

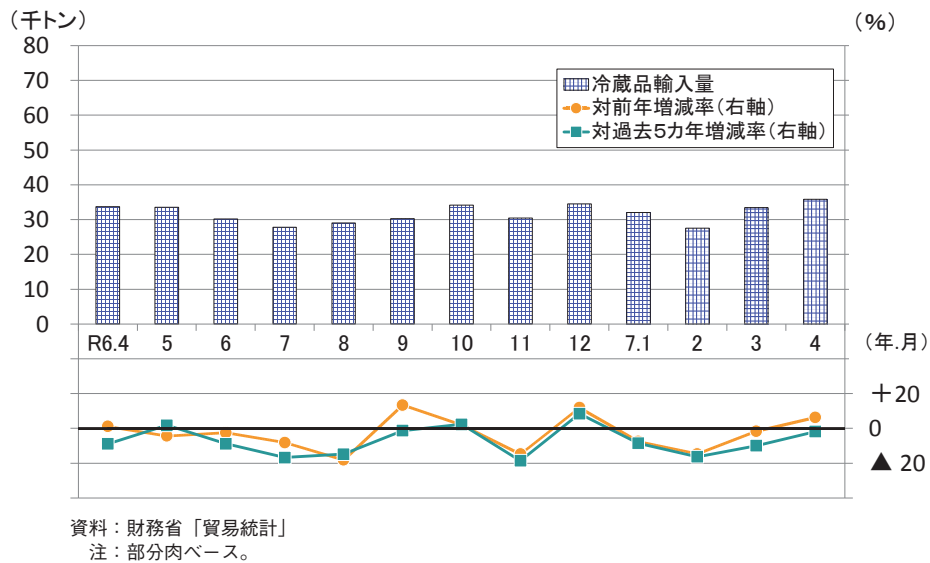
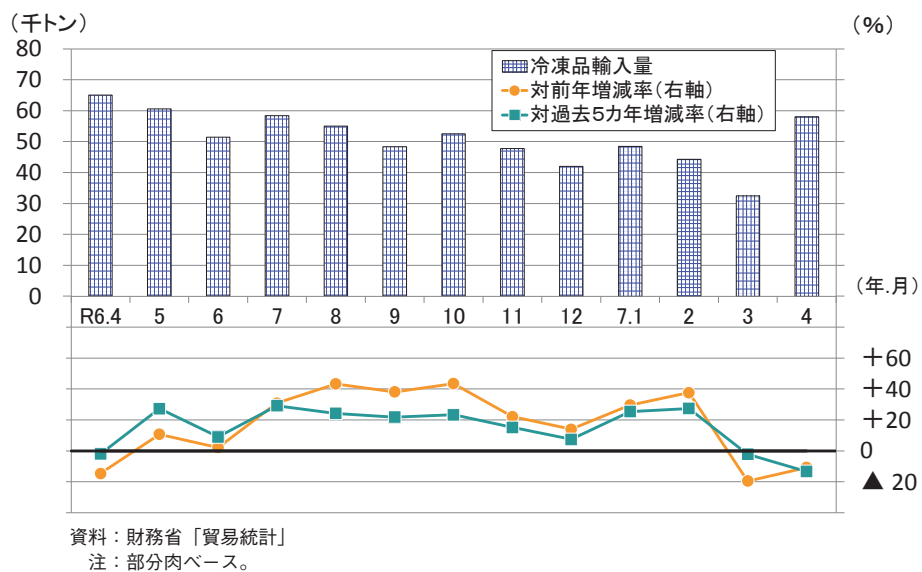


図3 冷凍豚肉輸入量の推移



家計消費量

4月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）^{（注2）}は、640グラム（前年同月比2.9%増）とわずかに上回る結果となった（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、1.3%減とわずかに下回る結果となった。

（注2）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

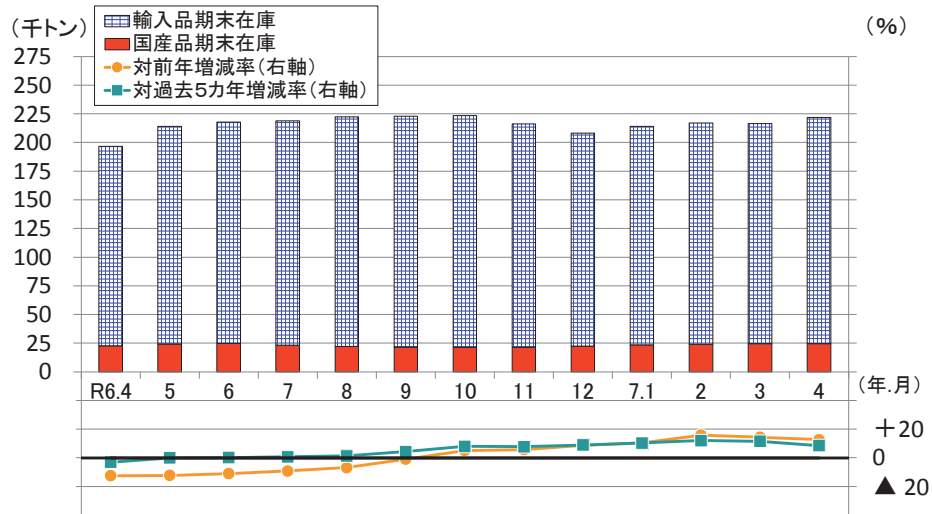
推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、22万1774トン（前年同月比12.7%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図4）。このうち、輸入品は、19万7256トン（同13.3%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

推定出回り量は、16万6029トン（同2.4%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は7万7266トン

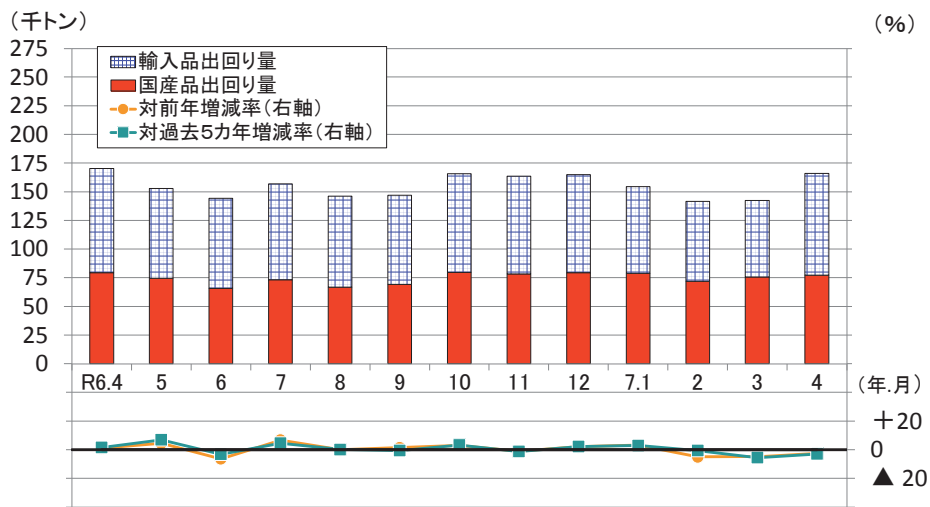
(同2.6%減)、輸入品は8万8763トン(同 下回った。
2.3%減)と、ともに前年同月をわずかに

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 小森 香穂)

鶏 肉

7 年 4 月の鶏肉生産量、前年同月比1.5%増

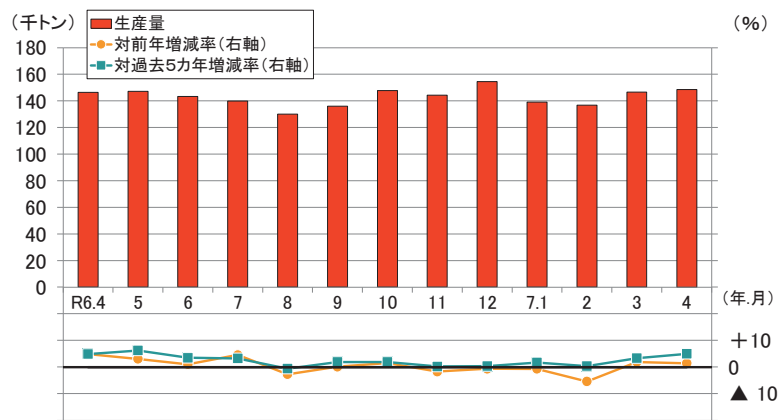
生産量

令和7年4月の鶏肉生産量は、14万8548トン（前年同月比1.5%増）と前年同月を

わずかに上回った（図1）。

なお、過去5カ年の4月の平均生産量との比較でも、5.0%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

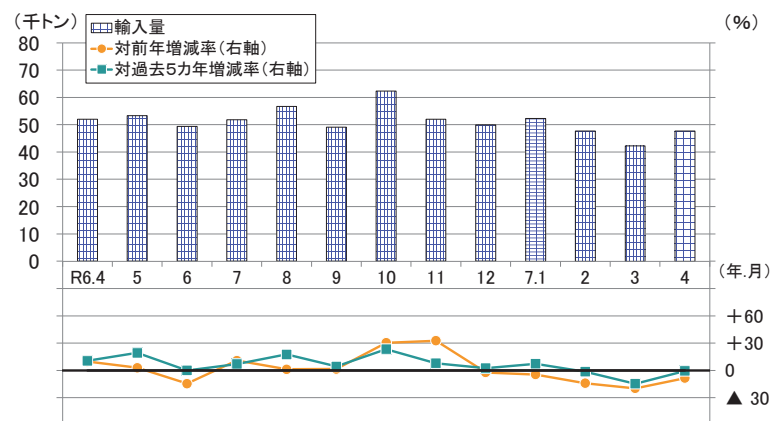
輸入量

4月の輸入量は、国内の節約志向を背景とした鶏肉需要により安定的に推移する中、前年同月のブラジル産輸入量が多かったことなど

から、4万7714トン（前年同月比8.3%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図2）。

なお、過去5カ年の4月の平均輸入量との比較でも、0.5%減とわずかに下回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

4月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）^{（注）}は、538グラム（前年同月比2.7%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との比較では、1.4%減とわずかに下回る結果となった。

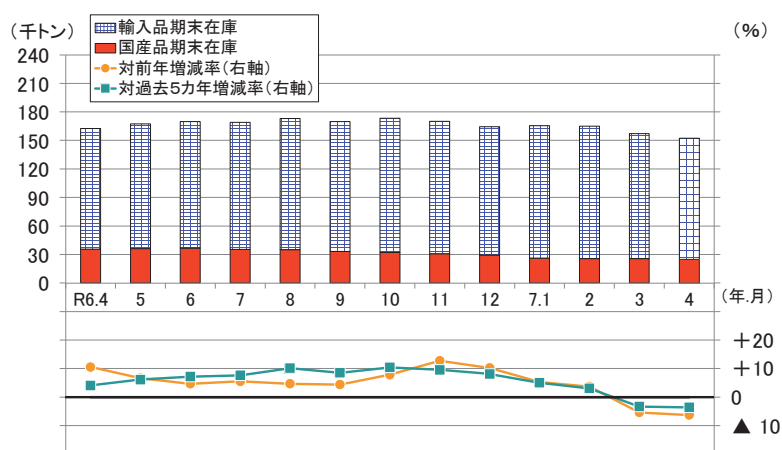
（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

推定期末在庫・推定出回り量

4月の推定期末在庫は、15万2405トン（前年同月比6.2%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。このうち、輸入品は12万7432トン（同0.3%増）と前年同月並みとなった。

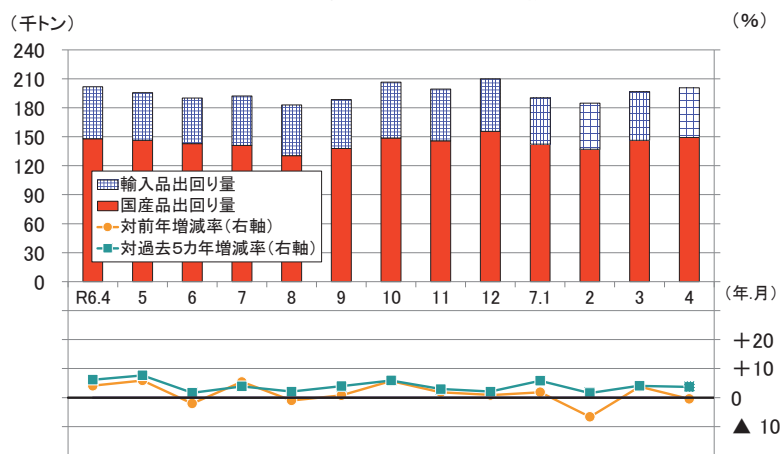
推定出回り量は、20万870トン（同0.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図4）。このうち、国産品は14万9346トン（同1.1%増）とわずかに前年同月を上回り、輸入品は5万1524トン（同4.7%減）とやや下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 越川 紗弥）

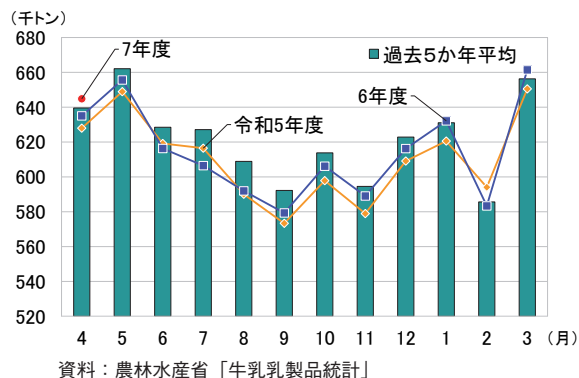
牛乳・乳製品

7年4月の全国の生乳生産量、前年同月を2カ月連続で上回る

北海道の生乳生産量、前年同月比2.9%増

令和7年4月の生乳生産量は、64万4847トン（前年同月比1.5%増）と2カ月連続で前年同月を上回り、前年2月がうるう年であった影響を除くと実質9カ月連続のプラスとなった（図1）。地域別では、北海道が36万5976トン（同2.9%増）となり、増加率は縮小するも、9カ月連続で前年同月を上回った。一方、都府県では27万8871トン（同0.3%減）と、10カ月連続で前年割れとなった。

図1 生乳生産量の推移



4月の生乳処理量を見用途別に見ると、牛乳等向けは31万1347トン（同0.1%増）と、前年同月並みとなった。このうち、業務用向けについては2万5077トン（同3.0%増）と2カ月連続で前年同月を上回った。

乳製品向けは32万9931トン（同3.0%増）と2カ月連続で前年同月を上回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは5万8539トン（同2.1%減）と下回った一方、チーズ向けは4万1586トン（同4.0%増）と2カ月

連続で上回った。また、脱脂粉乳・バター等向けは、18万4448トン（同5.0%増）となり、9カ月連続で前年同月を上回った（農畜産業振興機構調べ「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

全国の牛乳生産量、前年同月並みにとどまる

4月の牛乳等生産量を見ると、飲用牛乳等のうち牛乳は、業務用の増加はあったものの、24万9975キロリットル（前年同月比0.1%増）と前年同月並みとなった。一方、成分調整牛乳は前年割れが継続しており、1万6867キロリットル（同6.2%減）とかなりの程度下回った。加工乳についても、1万1399キロリットル（同6.1%減）と2カ月連続で下回った。

はっ酵乳は8万7698キロリットル（同0.5%増）と10カ月連続で上回った。

4月のバター在庫量、前年同月比13.7%増

4月のバターの生産量は7746トン（前年同月比6.2%増）と、生乳生産量の増加に伴い2カ月連続で前年同月を上回り、前年2月のうるう年を勘案すると実質9カ月連続での増加となった（図2）。出回り量も6590トン（同3.1%増）と前年同月を2カ月連続で上回った（農畜産業振興機構調べ）。在庫量については、8カ月連続で前年同月を上回り、4月末は2万9494トン（同13.7%増）となった（図3）。

図2 バターの生産量の推移

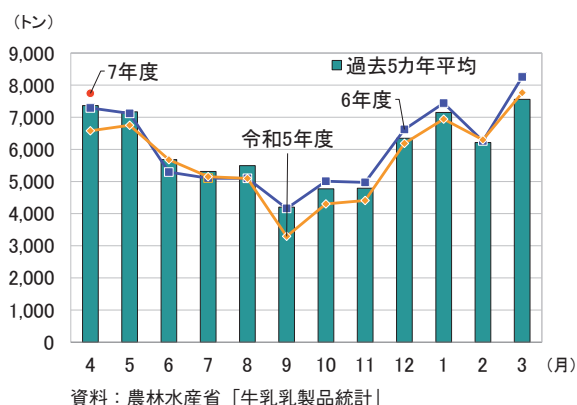


図4 脱脂粉乳の生産量の推移

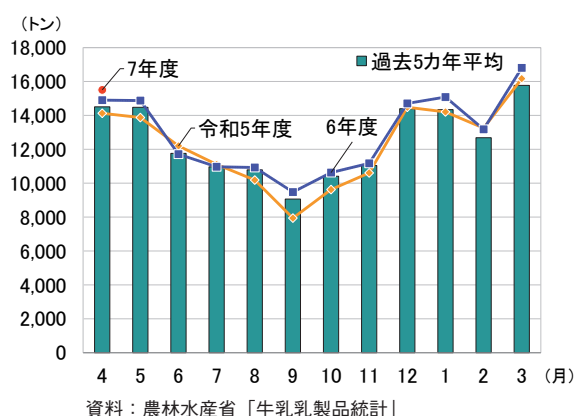


図3 バターの在庫量の推移

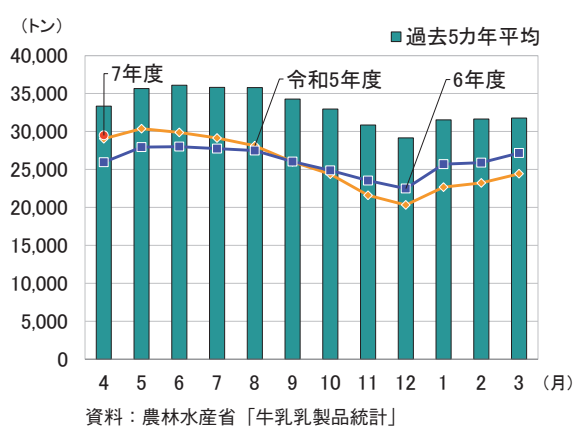
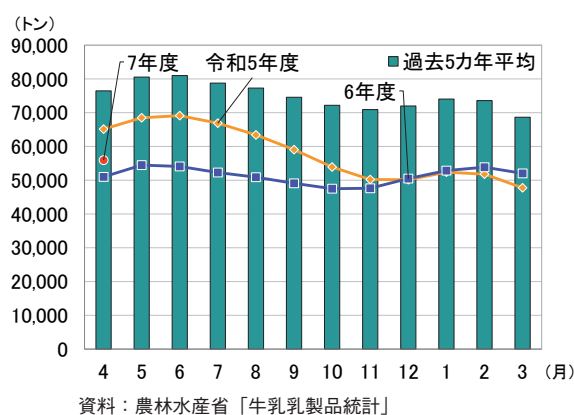


図5 脱脂粉乳の在庫量の推移



4月の脱脂粉乳生産量、前年同月比4.1%増

4月の脱脂粉乳の生産量は、バターと同様、1万5505トン（前年同月比4.1%増）と2カ月連続で前年同月を上回った（図4）。一方、出回り量は1万1581トン（同0.9%減）とわずかに下回ったが、前月に引き続き減少率は縮小した（農畜産業振興機構調べ）。4月末の在庫量は、5万5953トン（同9.7%増）と、5カ月連続で前年同月を上回った（図5）。

Jミルク、令和7年度の生乳生産量を前年度比0.5%減と見込む

一般社団法人Jミルクは令和7年5月30日、「2025年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」を公表した（表）。これによると、令和7年度の生乳生産量は733万5000トン（前年度比0.5%減）と2年ぶりに前年度を下回る見通しとなった。地域別に見ると、北海道は、428万2000トン（同0.4%増）と2年連続での増加となり、前回公表（1月31日）の見通しから増加に転じた。一方、都府県では305万3000トン（同1.8%減）と4年連続の減少と見込んでいる。

表 生乳生産量の見通し

(単位：千トン、%)

年度	全国		北海道		都府県	
	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)	生産量	前年度比 (増減率)
令和4年度	7,533	▲1.5	4,254	▲1.3	3,279	▲1.7
5年度	7,324	▲2.8	4,175	▲1.9	3,149	▲4.0
6年度	7,373	0.7	4,264	2.1	3,109	▲1.3
7年度 (見通し)	7,335	▲0.5	4,282	0.4	3,053	▲1.8

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、一般社団法人Jミルク「2025年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと課題について」(5月30日公表)

注：令和4～6年度は実績値、7年度は見通しである。

牛乳類の生産量については、需要面で依然として苦戦が続く中、436万7000キロリットル（前年度比1.6%減）と、前年度を下回る見通しとなった。内訳を見ると、全ての品目で前回から下方修正され、牛乳は304万6000キロリットル（同0.9%減）、加工乳は14万4000キロリットル（同2.2%減）、成分調整牛乳は20万4000キロリットル（同4.2%減）、乳飲料は97万3000キロリットル（同3.2%減）、はっ酵乳は103万9000キロリットル（同0.1%減）と、いずれも前年度から減少する見込みとなっている。

乳製品向け処理量は、345万1000トン（同0.1%増）と前年並みにとどまる見通しである。品目別に見ると、脱脂粉乳・バター等向けは182万1000トン（同1.4%増）と増加を見込む一方、チーズ向けは42万トン

（同1.0%減）、生クリーム等向けは120万9000トン（同1.3%減）と減少を見込んでいる。

脱脂粉乳の期末在庫量は、8万600トン（同54.9%増）と前年度から大幅に積み増す見通しとなった。在庫低減対策を加味しない実需ベースでは、引き続き需要量が供給量を大きく下回っているとし、期中の乳価改定により在庫が想定以上に積み増される懸念についても言及している。また、バターについては、単年度の需要量が国内生産量を上回る状況が続いているものの、期末在庫量は3万1100トン（同14.5%増）と、前年度からかなり大きく積み増すとみている。

(酪農乳業部 天野 明日香)

鶏 卵

7年5月の鶏卵卸売価格、前年同月比66.7%高

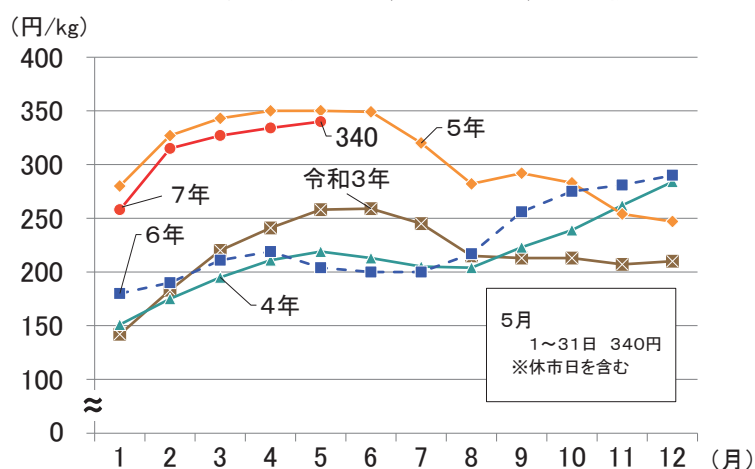
卸売価格

令和7年5月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり340円（前年同月差136円高、前年同月比66.7%高）と、前月から同6円上昇し、前年同月の同価格を大幅に上回った（図）。同価格の日ごとの推移を見ると、1カ月を通して同340円となった。なお、過去5カ年の5月の平均卸売価格との比較でも、41.7%高と大幅に上回る結果

となった。

供給面を見ると、依然として高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）による生産量の減少および一部の生産者における採卵鶏のローテーションの影響を受けて、生産量は低位で推移した。一方、需要面を見ると、相場高騰により量販店において店頭売価が高水準で推移した。業務筋や加工筋ではHPAI発生による在庫ひっ迫の影響もあり、引き合いが継続している。

図 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

家計消費量

4月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）^{（注）}は、905グラム（前年同月比3.3%増）と前年同月をやや上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の4月の平均消費量との

比較では、2.8%減とわずかに下回る結果となった。

（注）1世帯当たりの数値を当該月の世帯人数で除して算出。

（畜産振興部 越川 紗弥）

令和6年度食肉流通統計・令和6年食鳥流通統計調査結果

農林水産省が公表している畜産物流通調査のうち、本稿では、「食肉流通統計」（令和6年4月～7年3月）^{（注1）}より成牛（和牛、交雑牛、乳牛）および豚のと畜頭数、主要市場^{（注2）}における卸売価格および取引頭数について、また、「令和6年食鳥流通統計調査結果」（令和6年1～12月）^{（注3）}より食鳥の処理羽数および重量について報告する。

（注1）令和6年4月～7年3月の月別データ（速報値）を機構にて集計。

（注2）中央卸売市場および地方卸売市場を指す。「中央卸売市場」は、卸売市場法（昭和46年法律第35号）の規定により開設されている仙台、さいたま、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、広島および福岡の10市場。「地方卸売市場」は、卸売市場法の規定により開設されている地方卸売市場のうち、畜産経営の安定に関する法律（昭和36年法律第183号）第3条第1項の標準的販売価格の算出に用いられる市場をいい、茨城、栃木、群馬、川口、山梨、岐阜、浜松、東三河、四日市、姫路、加古川、西宮、岡山、坂出および佐世保の15市場。

（注3）速報値。

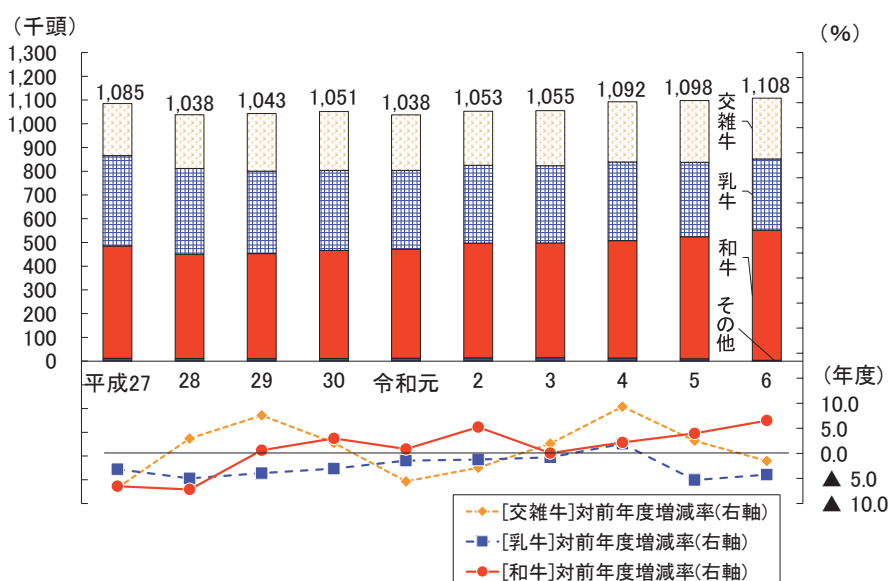
【牛肉】

成牛のと畜頭数、和牛の増加により5年連続の増加

令和6年度の成牛のと畜頭数は、110万7970頭（前年度比0.9%増）と、前年度をわずかに上回り、5年連続の増加となった（図1）。

品種別に見ると、和牛は、54万7776頭（同6.6%増）と前年度をかなりの程度上回り、8年連続の増加となった。一方、交雑牛は、25万6109頭（同1.5%減）と前年度をわずかに下回り、3年連続の増加から一転し、再び減少となった。乳牛は、30万665頭（同4.2%減）と前年度をやや下回り、2年連続の減少となった。なお、と畜頭数全体に占める各品種の割合は、和牛が49.4%、交雑牛が23.1%、乳牛が27.1%となり、引き続き和牛の割合が最も大きい結果となった。

図1 成牛の年度別と畜頭数の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」

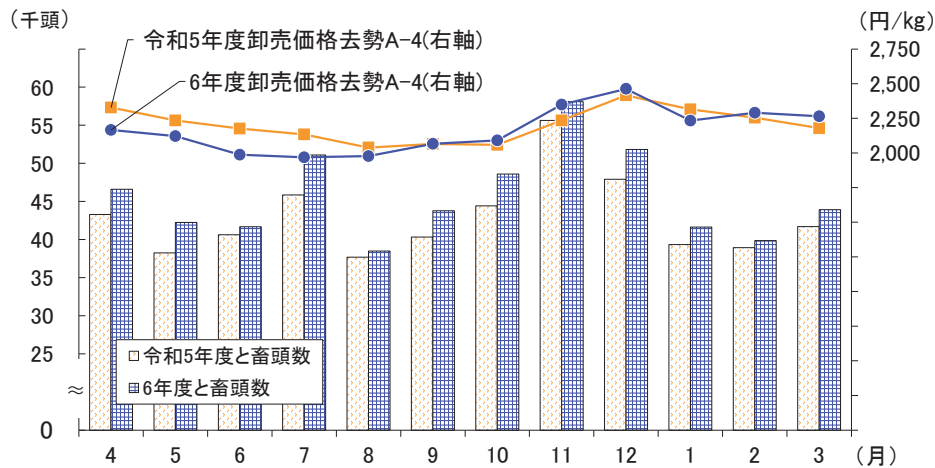
和牛の卸売価格、年度後半に盛り返す

令和6年度の和牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、11月の5万8081頭（前年同月比4.4％増）、次いで12月の5万1811頭（同8.2％増）、7月の5万1085頭（同11.4％増）の順となった（図2）。和牛のと畜頭数は、例年、最需要期の年末に向けてピークを迎える他、春のお祝い需要、お盆などの時期に増加する傾向があるが、

6年度も同様の傾向が見られた。

月別の卸売価格（東京、去勢A－4）を見ると、年度前半では、消費抑制気運から前年同月を下回って推移したが、9月以降は7年1月を除き前年同月を上回り、前々年度の水準まで回復した。なお、最も高かったのが12月の1キログラム当たり2463円（同1.9％高）、最も安かったのが7月の同1969円（同7.7％安）となった。

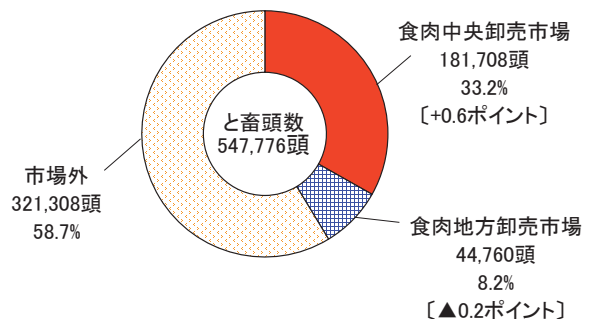
図2 和牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社
注：消費税を含む。

和牛の主要市場における市場経由率^(注4)を見ると、食肉中央卸売市場が33.2％（18万1708頭）と前年度より0.6ポイント上昇し、食肉地方卸売市場は8.2％（4万4760頭）と同じく0.2ポイント低下した（図3）。この結果、市場全体では41.3％（22万6468頭）と前年度より0.3ポイント上昇した。

図3 令和6年度 和牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

(注4) 卸売市場における取引成立頭数が、全と畜頭数に対して占める割合。なお、取引成立頭数は、卸売市場への上場頭数のうち、卸売業者と売買参加者との間に取引が成立した頭数。

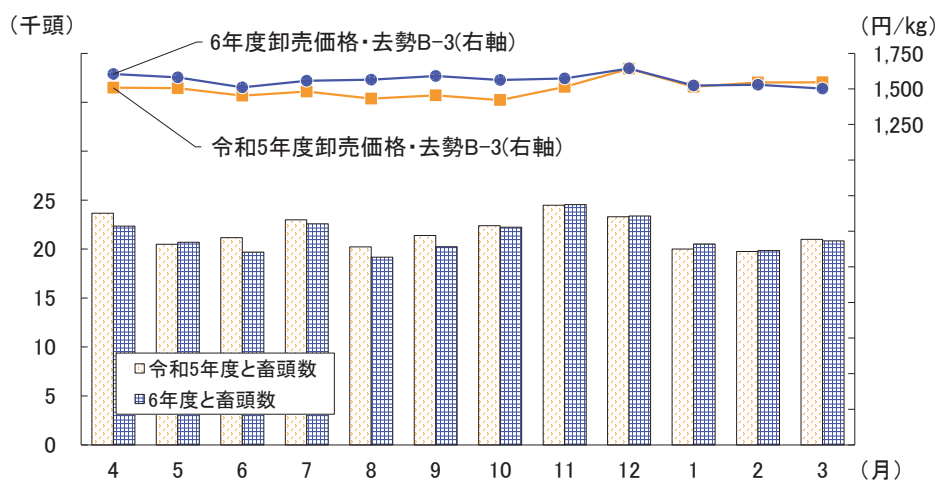
交雑牛の卸売価格、年度後半で一服

令和6年度の交雑牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、11月の2万4545頭（前年同月比0.3%増）、次いで12月の2万3383頭（同0.4%増）、7月の2万2586頭（同1.7%減）の順となった（図4）。

月別の卸売価格（東京、去勢B-3）を

見ると、令和5年11月以降の価格上昇傾向が続き、6年4月～翌7年1月までは前年同月を上回ったが、7年2月以降は、前年同月を下回って推移したものの、1500円台を維持した。なお、最も高かったのが12月の1キログラム当たり1644円（同0.1%高）、最も安かったのが7年3月の1502円（同2.8%安）となった。

図4 交雑牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社
注：消費税を含む。

交雑牛の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は26.1%（6万6790頭）と前年度より9.8ポイント減少し、食肉地方卸売市場も14.3%（3万6667頭）と同じく0.1ポイント減少した（図5）。この

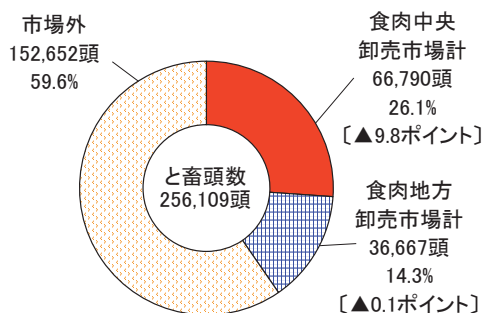
結果、市場全体では40.4%（10万3457頭）と前年度より9.9ポイント減少した。

乳牛のと畜頭数、依然として減少傾向が続く

令和6年度の乳牛のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、10月の2万8544頭（前年同月比0.9%増）で、次いで4月の2万6880頭（同2.8%増）、11月の2万6806頭（同4.1%減）の順となり、4月、7月および10月を除き、前年同月を下回った（図6）。

月別の卸売価格（東京、去勢B-2）を見ると、5月以降、前年同月を上回り、6月は

図5 令和6年度 交雑牛の市場経由率

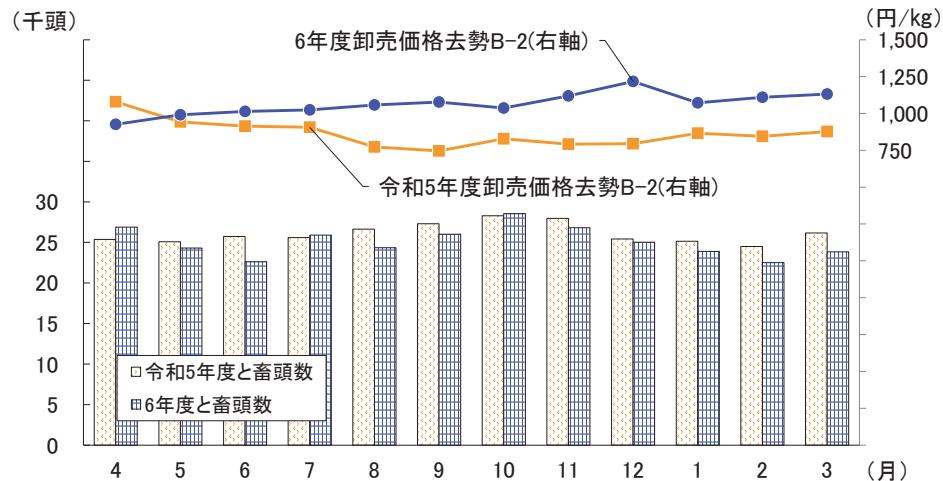


資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

13カ月ぶりに1000円台に回復し、以降は1000円台を超える状況が持続した。なお、最も高かったのが12月の1キログラム当たり

1217円（同53.1%高）、最も安かったのが4月の同926円（同14.2%安）となった。

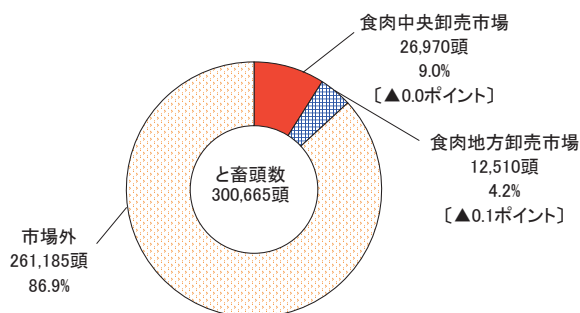
図6 乳牛の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社
注：消費税を含む。

乳牛の主要市場における市場経由率を見ると、食肉中央卸売市場は9.0%（2万6970頭）、食肉地方卸売市場も4.2%（1万2510頭）とともに前年度並みであった（図7）。この結果、市場全体では13.1%（3万9480頭）と前年度より0.2ポイント低下した。

図7 令和6年度 乳牛の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

【豚肉】

豚のと畜頭数、3年連続で減少

令和6年度の豚のと畜頭数は、1615万3083頭（前年度比1.5%減）と前年度をわずかに下回った（図8）。これまで、おおむね増加傾向で推移していたものの、小規模の飼養者層を中心とした廃業などによる飼養頭数の減少などから、4年度および5年度は減少し、さらに6年度は平成27年度を下回る水準にまで減少した。

6年度の豚のと畜頭数を月別に見ると、最も多かったのが、12月の146万4169頭（前年同月比0.2%増）、次いで10月の145万8325頭（同1.5%増）、11月の140万9881頭（同4.9%減）の順となった（図9）。

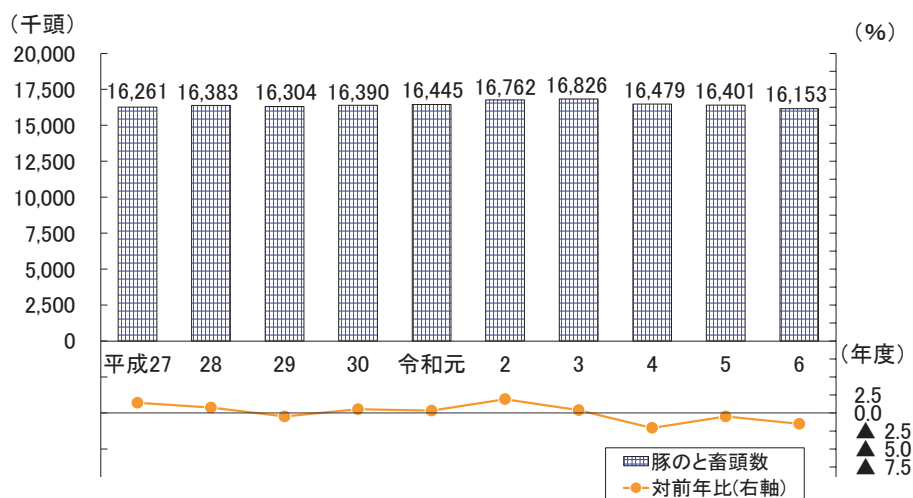
月別の卸売価格（東京、上）を見ると、9月を除き、前年同月を上回った。節約志向の高まりなどによる牛肉の代替としての需要の

増加などが要因として考えられる。なお、最も高かったのが7月の1キログラム当たり831円(同22.4%高)と初めて800円を超え、最も安かったのが11月の同571円(同10.0%高)となった。

豚の主要市場における市場経由率を見ると、

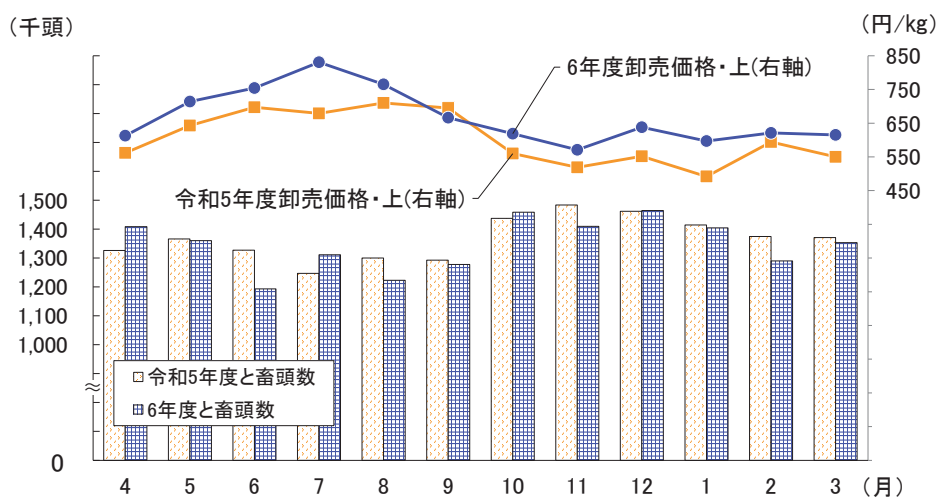
食肉中央卸売市場は5.5%(89万4929頭)と前年度より0.2ポイント上昇し、食肉地方卸売市場は6.8%(109万5459頭)と前年並みとなった(図10)。この結果、市場全体でも12.3%(199万388頭)と0.1ポイント上昇した。

図8 豚の年度別と畜頭数の推移



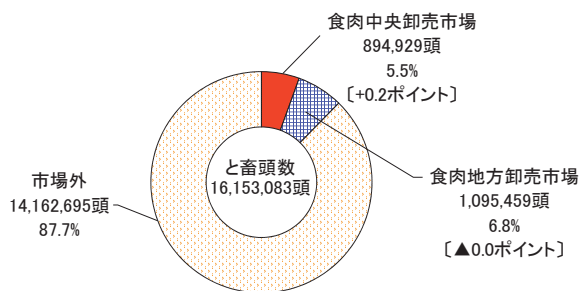
資料：農林水産省「食肉流通統計」

図9 豚の月別と畜頭数および卸売価格の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場株式会社
注：消費税を含む。

図10 令和6年度 豚の市場経由率



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：〔 〕は対前年度とのポイントの差。

【鶏肉】

肉用若鶏の処理重量、増加傾向で推移

令和6年（1～12月）の食鳥処理羽数^{（注5）}は、8億2805万2000羽（前年比0.8%増）と前年をわずかに上回った。また、食鳥処理重量^{（注6）}についても、241万3698トン（同1.2%増）と前年をわずかに上回った。

種類別に見ると、全体の約9割を占める「肉用若鶏（ふ化後3カ月齢未満）」は、処理羽数

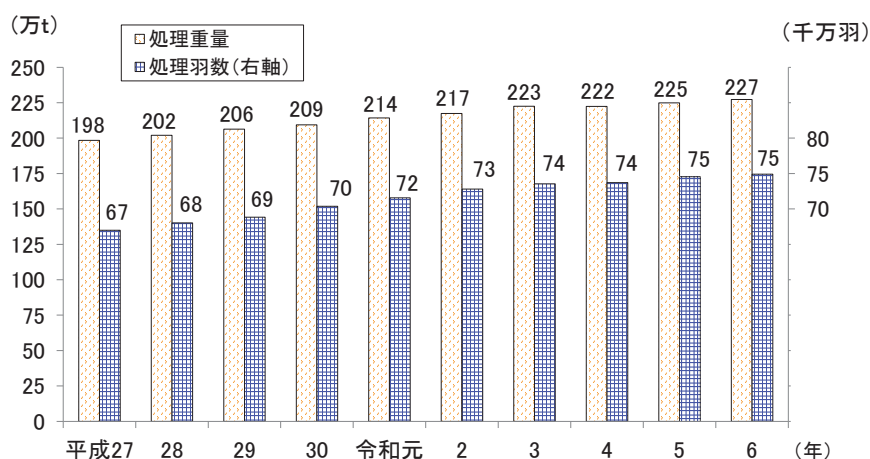
が7億4913万羽（同0.5%増）、処理重量が227万2638トン（同1.0%増）と、いずれも前年をわずかに上回った（図11）。消費者の健康志向や根強い国産志向による堅調な需要が継続しており、近年増加傾向で推移している。

全体の1割を占める「廃鶏（採卵鶏または種鶏を廃用した鶏）」は、処理羽数が7775万1000羽（同3.8%増）、処理重量が13万7644トン（同4.6%増）と、いずれも前年をやや上回った（図12）。

その他の地鶏などが含まれる「その他肉用鶏^{（注7）}（ふ化後3カ月齢以上）」は、処理羽数が117万1000羽（同2.2%減）、処理重量が3416トン（同1.0%減）と、いずれも前年をわずかに下回った（図13）。

（注5） 調査対象は年間食鳥処理羽数30万羽超の食鳥処理場。
（注6） 食鳥処理場が肉用目的で処理した生体の重量。
（注7） ふ化後3カ月齢以上の鶏。地鶏や銘柄鶏が含まれる。

図11 肉用若鶏の食鳥処理重量および処理羽数の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計調査」

図12 廃鶏の食鳥処理重量および処理羽数の推移

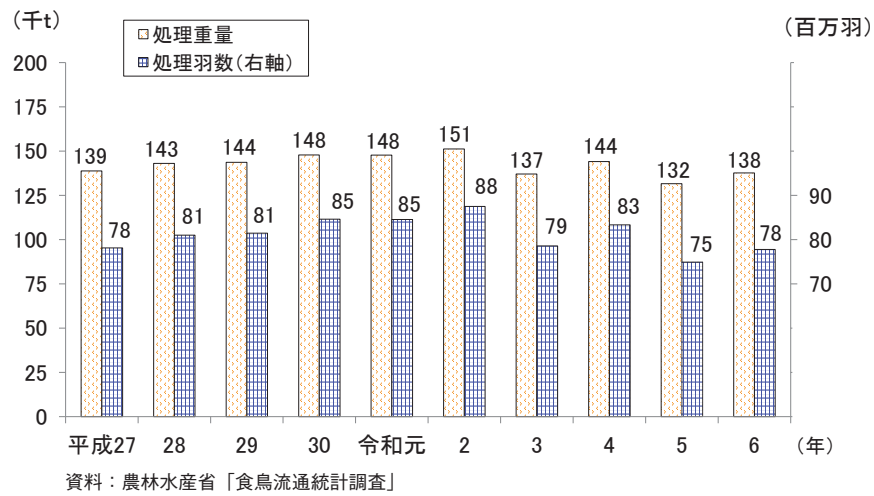
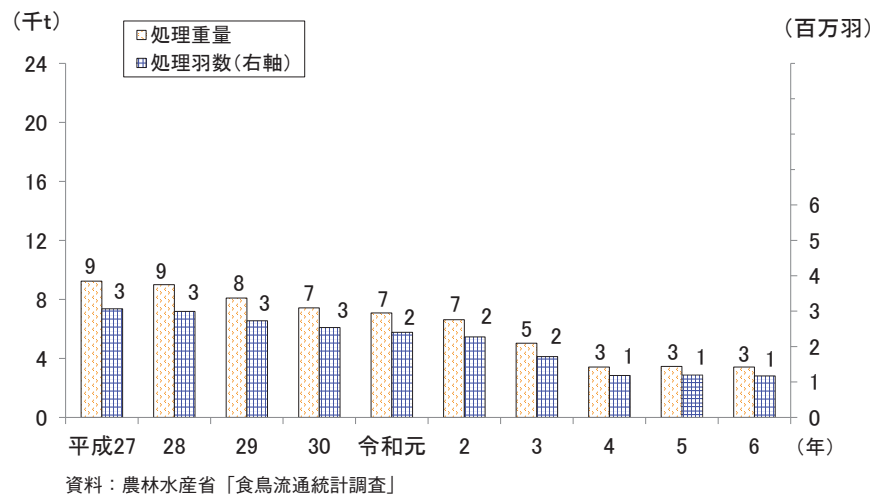


図13 その他の肉用鶏の食鳥処理重量および処理羽数の推移



(畜産振興部 越川 紗弥)